

1章 入試小論文

君達の今通っている高校で、「小論文」がカリキュラムの中に設定されている学校は、皆無に近いと思う。かうじて、国語（現代文）の中で「小論文」の基礎を教えてくれる学校があるくらいだろう。だからこそ君達は、難関大学受験に出題されるハイレベルの「小論文」課題に立ち向かうため、この講座を選択したのではないだろうか。では、そのような君達に、次のような質問をしたい。

高校で学んでいない「小論文」が、なぜ、大学入試の受験科目として設定されているのだろうか。

この問いにしっかり答えられない受験生に限って、「小論文なんて、ただ、マス目に字を埋めていけばよいのだ」「ただ、文章を書けばいいんですよ」という安易な姿勢のまま、ダラダラ学習していくことになり、最終的には、本番で痛い目にあう。決してそういうことにならないように、ここでしっかり、「小論文」という受験科目が設定されている背景について、学んでおこう。

●大学改革・大学入試制度の見直しとの関わり

従来の大学入試制度は、偏差値受験競争の過熱ぶりを招き、大学入試をゴールにして、小学校受験・中学校受験・高校受験が連なっており、受験競争は低年齢化している状況にあると言える。大学入試の改革は、このような日本の教育全体の見直しにもつながる。

見直しのポイント

か。
入学のためだけに存在する今の受験システムが、本当に優秀な人材を見極めるモノサシとして機能しているの

←
偏差値・受験テクニック（センター試験等に見られる択一式問題形式が生む）を意識した、断片的な知識の詰込みや、瞬間的な判断で正誤を見極める問題に耐えられる学生が生き残る受験制度では、論理的思考力（次節「小論文とは何か」参照）や物事に対する意欲などの、学力以外の能力が育たない。そうした能力を持つ学生が評価されないことに、大学側が危機感を抱くようになる。

←
「脱偏差値」「脱画一化」を合言葉に、大学が、新しいモノサシ探しに試行錯誤しはじめる。

◆大学受験・大学入試制度において、大学に必要な人材を選びだす尺度が、偏差値だけではなく、多様化していかなければならないという認識が広まっている中で、「小論文」がクローズアップされるようになった。

評価尺度の多様化↓二次試験において面接や論文を課す大学の増加。

調査書重視型の新入試制度の導入（特に医学部）
受験科目を軽減する。

◆「脱偏差値」「脱画一化」を意図した科目であると考えられるならば、パターン化した答案・優等生的答案・一般論羅列型答案を提出していたのでは、かえってやぶへびだということを認識すべき。

大学入試制度の見直しの中で、「小論文」が登場してきた概略をみてきたが、ここでもう一度質問してみたい。

「小論文」が、なぜ、大学入試の受験科目として設定されているのだろうか。

「小論文」試験を課すことによって、大学側の狙い、大学はどのような人材を求めているのだろうか。



要求に応えるためには、何が必要になるのだろうか。